『父が為　沈みし地獄』より第一話

著者：金目

目次

登場人物紹介
第一話
（サンプル掲載はここまでとなります）

（以下、製品版収録）
第二話：鞭打ち、玉責め
第三話：フェラチオ
第四話：アナル調教、トコロテン
第五話：虎雄と源二、互いのチンポを模したディルドでイかされる

【お願い】
この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。
無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いします。
この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。
作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

荒城　虎雄（あらき　とらお）
男。34 歳。無職。

体育大学卒業後、剣術修行のために海外を放浪していた。
平常時 10.6 センチ、勃起時 25.5 センチの童貞チンポ。

荒城　源二（あらき　げんじ）
男。56 歳。剣術道場師範。
平常時 7.3 センチ、勃起時 17.6 センチのチンポ。

火浦　相馬（ひうら　そうま）
男。44 歳。ハウスキーパー。
源二に雇われ、身の回りの世話をしている。

毒島　徳郎（ぶすじま　とくろう）
男。38 歳。実業家にして源二の門下生。
荒城親子を辱める首謀者。

糸井
神木
沼沢
源二の門下生たち。
毒島徳郎に従い、荒城親子を辱める。

第一話

荒城虎雄は緊張した面持ちで深夜の神社へと向かっていた。
虎雄と虎雄の父親である源二を脅迫している徳郎の命令で呼び出されたのだ。

虎雄が海外に武者修行に行く前は継承者がいなくなって寂れていた神社。
そこで深夜に何をするのかは分からなかったが、虎雄は尊敬する父親である源二と、己の名誉を守るためにも徳郎には逆らえないのだ。
無精髭でさえ、男らしさの彩りとなっている虎雄の横顔は雄の魅力に溢れていた。
屈強な体躯を野生動物のようなしなやかさで動かしている有様と合わせて、雄の理想を体現していると言っても過言ではないだろう。
この野性味溢れる雄が童貞だと伝えても信じる者は少ないだろう。
虎雄の野性味はそれほどまでに濃厚だったのだ。
神社への最後の角を曲がった虎雄はおや、と思った。
神社に明かりが見えるのだ。
揺らめきを伴うこの明かりは篝火だろうか。
虎雄は神社へと近づいていく。
深夜であるにもかかわらず、ざわめきが聞こえてくる。
かなりの人数が集まっているようだ。
虎雄は不安に襲われた。
虎雄は海外で武者修行をしていたので、暴力を伴うことならば慣れもあるし、覚悟もできている。
だが、徳郎による辱めは虎雄が不慣れとする領域、即ち性的な辱めを主としているのだ。
尊敬する父親である源二の金言を守り、オナニーに耽ることすら避けてきた無垢な虎雄にとって、徳郎による辱めは劇薬同然であった。
そんな徳郎が今夜も待ち構えているのだと思うと、虎雄は未知への恐怖に震えてしまい、足も止まってしまう。
虎雄は怖気ずく己の頬を叩き、喝を入れた。
虎雄がここで逃げれば、尊敬する父親である源二の淫姿がばらまかれてしまう。
そうなれば、源二の名誉は致命的に損なわれてしまうのだ。
虎雄は、源二の為にも徳郎に従うしかないのだ。
虎雄は神社の鳥居の前の階段にたどり着いた。
そこには徳郎の手下である神木が立っていた。
「よく来たな、虎雄」
神木がにやにやと笑っている。
「毒島さんはこの上でお前を待っているよ」
「分かった」
虎雄は頷き、階段を上がろうとした。
「ちょっと待った」
神木が虎雄の行く手を遮った。
「人の話は最後まで聞けって。
お前は、これから全裸になるんだ」
「は？」
神木の言葉に虎雄は戸惑った。

虎雄にとって神社とは神聖な場所だ。
そんな場所に全裸で入るということがまずありえない。
そして、その神社には騒めき声から察するに多くの人が集まっている。
そんな中、全裸を晒せというのか、と不服に思ったのだ。
「忘れてないか。
お前は源二殿の代理だ。
源二殿がこなしたことは全部こなさないと駄目だろ？」
神木の言葉に虎雄は頭が真っ白になった。
虎雄は源二が徳郎たちに辱められていることを知っている。
けれど、衆目に全裸を晒すような真似までさせられているとは想像もしていなかったのだ。
尊敬する父親である源二が受けた辱めを思い、虎雄は歯ぎしりをした。
「どうした、虎雄？
お前は、源二殿の代理をするのだろう？
それとも、入院中の源二殿をここに呼ぼうか？」
神木の言葉に虎雄はぞっとした。
入院中の源二に無理はさせられない。
それに、源二がこれ以上辱められるのは虎雄には耐えがたいことなのだ。
「分かった」
虎雄は頷き、服を脱ぎ始めた。
分厚い筋肉に覆われた裸体が夜の静けさの中で露わになる。
虎雄の筋肉は野生の魅力に溢れており、常人ならば汚らしささえ伴う体毛が雄の彩りとなっている。
虎雄はズボンも脱ぎ、白褌一枚になった。
白褌は虎雄の猛虎チンポで大きく盛り上がっている。
屈強な尻は雄肉で充溢しており、屈強な体躯を支えうる強靭さを示していた。
虎雄は白褌に手をかけ、悩んだ。
虎雄の常識と羞恥心が野外で全裸になることに抵抗したのだ。
虎雄は歯を食いしばった。
そして、尊敬する父親である源二のことを考えた。
理由は分からないが、徳郎に罠にかけられたに違いない源二の名誉と男気を守るためには、虎雄が恥辱の泥を被るしかないのだ。
虎雄は覚悟を決め、白褌を解き、もっこりを外気に晒した。
ぼろりん！
虎雄の猛虎チンポが露わになった。
金玉は人並み以上に大きく、陰茎は太く長く、亀頭はパンパンに膨れた童貞のピンク色をしている。
濃いチン毛に埋もれることなく存在を主張して余りある虎雄の猛虎チンポだ。
「源二殿を超えるチンポだな、虎雄」
「煩い」

神木の揶揄に虎雄は不快感を示した。
確かに、虎雄の猛虎チンポは源二のチンポに比べて大きい。
だが、そんなことは虎雄が抱く源二への敬愛の念には全く影響しないし、源二という男の偉大さとは無関係なのだ。
「それじゃあ、男らしく、チンポを隠さずぶらぶらさせるんだぞ」
神木に雄肉で充溢する尻を叩かれ、虎雄は顔をしかめた。
そして、覚悟を決めて鳥居へと続く階段を上がり始めた。

鳥居をくぐった虎雄は、人混みの多さに足を止めた。
こんな深夜の寂れた神社だというのに、石畳の参道の左右をみっしりと男女が埋め尽くしていたのだ。
子どもの姿は見えないが、不特定多数の見知らぬ男女に己の全裸を見られていることに虎雄は震えた。
鍛錬で鍛え上げた己の肉体が見世物にされている現状は、虎雄にとって不服でしかないものである。
「今年の種馬は若いのね」
「今までの老齢の人もよかったけど、今年の種馬は野生的でいいな」
「チンポもでかいし、これなら安心だな」
見物客たちが虎雄について好き勝手に論評し合っている。
そんな中、拝殿へと続く石畳を歩いて徳郎がやってきた。
「よお、虎雄」
「今夜は何をさせようっていうんですか？」
虎雄は徳郎への嫌悪感を隠そうともしなかった。
尊敬する男である源二を罠にかけ、辱め、その毒牙を虎雄にもかけようとしている徳郎への好意など一片たりとも持ち合わせているはずがないのだ。
「ん？　お前が望んだとおり、源二殿の代役だよ」
だが、徳郎は上機嫌で虎雄に話しかける。
己の優位を疑っていないのだ。
徳郎の太々しさに虎雄は苛々する。
「今夜は、ここで儀式をしてもらう。
と言っても、虎雄がすることは簡単なことだ」
徳郎がにやりと笑った。
「ここから拝殿までチンポをぶらぶらさせながら歩いて、拝殿の前に掲げられている絵馬に向かってザーメン、いや、お前の場合は童貞汁だな。
童貞汁をぶっぱなす。
そのあと歩いて鳥居まで戻る。
こいつを三度繰り返すだけだ」
「何だと！」
徳郎の言葉に虎雄は激高した。

尊敬する父親である源二から「オナニーは男として最も無防備であり無様な姿である」と教え込まれてきた虎雄は、オナニーを忌避している。
性欲に負けてオナニーをするときは、尊敬する父親である源二の言葉を破ってしまうことへの悔恨から、源二に許しを求めながら絶頂を迎えるほど、源二の金言への服従心が強いのだ。
そのことは、以前に虎雄に服従の証としてオナニーをさせた徳郎も知っているはずだ。
にもかかわらず、虎雄にこれほど多くの衆目の前で三度もオナニーをしろというのだ。
オナニーを見せることは、虎雄にとって完全降伏と屈辱の行為でしかない。
虎雄には雄としての自負がある。
武術家としての自信もある。
そんな虎雄に不特定多数の人間の前で完全降伏と屈辱の行為であるオナニーをしろというのか。
それを、三度もしろというのか。
虎雄は徳郎に殴りかかりたい衝動を覚えた。
だが、虎雄はその衝動を必死に堪えた。
徳郎を害すれば、仲間たちが保有している源二の恥辱動画が拡散されてしまう。
そうなれば、源二の男気も名誉もズタズタになってしまう。
耐えるしかないのだ。
耐えるしか……ないのだ……
「お前が何を考えてそんなに怒っているかは知らないが、オナニーなんて男なら誰でもする行為だろ？
生娘でもあるまいし、童貞汁を見せることぐらいでガタガタ言うなよ」
徳郎が必死に怒りを抑えようとする虎雄の神経を逆撫でにする言葉を発する。
徳郎は確信しているのだ。
虎雄が徳郎に逆らえないことを確信し、己が繋いだ鎖の強度を確認するべく、わざと虎雄を怒らせようとしているのだ。
虎雄は徳郎の笑みの下にある邪まな思いを感じ取った。
その性根の腐り具合に腹が立つが、虎雄は徳郎には逆らえないのだ。
「……分かった」
虎雄は怒りを抑えて頷いた。
「ああ、そのチンポは隠すなよ。
源二殿もチンポをぶらぶらさせていたんだからな」
源二の名を出され、虎雄は頭に血が上った。
だが、源二のために虎雄はその怒りを抑え込むしかない。
虎雄は歯を食いしばり、徳郎への怒りを抑え込む。
「よし、じゃあ始めろ」
徳郎の背中を叩かれ、虎雄は石畳を歩き始めた。
己の男気を自らの手で踏みにじるために。

「チンポの迫力が凄いわね」
「屈強な肉体に相応しいチンポだな」
「男としてかくありたいよな、立場はともかく」
「違いないな」
　観客たちが虎雄の肉体とチンポへの称賛の言葉を口にしている。
　虎雄は猛虎チンポをぶらぶらさせながら、石畳の上を歩く。
　時折、シャッター音が響くことから、虎雄の肉体は見世物として消費されていることが明らかだ。
　虎雄にとっては初めての屈辱であった。
　海外放浪の修業中、虎雄はその肉体の練度を称賛されることが多かった。
　だが、あの頃の称賛は虎雄への敬意に溢れており、虎雄の肉体を見世物として消費しようとする欲望は感じられなかった。
　けれど、今は違う。
　観客たちは虎雄の肉体を鍛え上げた年数と鍛錬への敬意もなく、ただ、物珍しい見世物として虎雄を消費している。
　雄としての自負に溢れる虎雄にとって、消費される立場に追いやられたことは屈辱でしかない。
　そして、この屈辱を尊敬する父親である源二も味わわされたのだと思うと首謀者である徳郎への憎しみが沸き上がる。
　憎しみで人を殺せるのならば、徳郎もその共犯たちも既に惨たらしい末路を晒しているだろう。
　けれど、現実にはそのような奇跡は起こらない。
　だから、虎雄は屈辱に耐えながら猛虎チンポをぶらぶらさせて拝殿までの石畳を歩く。
　拝殿の前には大きな絵馬が掛けられていた。
　その絵馬を見た虎雄は徳郎の悪意にぞっとした。
　絵馬には下着姿の女性の絵が描かれていた。
　その顔は、虎雄が高校生時代に秘かに憧れていた女性教諭の顔にそっくりだったのだ。
　虎雄の淡い青春が、徳郎の悪意によって踏みにじられたのだ。
　虎雄は激しい怒りに思わず背後に立っている徳郎を振り返った。
　徳郎は虎雄の怒りを理解している様子で、にやにやと笑っている。
　虎雄は駆け戻って徳郎を殴り倒したい衝動に襲われた。
　だが、そんな虎雄の心を見抜いたのか、徳郎の唇が動いた。

　げ　ん　じ　ど　の

　その言葉に虎雄は怒りに震える己を縊り殺さんばかりの熱量で押さえ込んだ。
　そう。
　徳郎に逆らえば尊敬する父親である源二の男気と名誉が致命的に損なわれてしまう。
　それだけは、何としても避けなければならないのだ。
「あらあら、種馬の顔が真っ赤になったわよ」

「絵馬に興奮したんだろうな」
「初心だなあ、今年の種馬は」
　観客たちが虎雄の様子を嘲笑う。
　虎雄は怒りに全身を震わせ、猛虎チンポをぶらぶらさせる。
　虎雄は怒りを足に込めて、一歩一歩拝殿へと近づく。
　拝殿の前の石畳にはご丁寧に蛍光テープで円が描かれていた。
　ここに立ってオナニーをしろということのようだ。
　虎雄は不快感に顔を歪ませながら、円の中に入った。
　そして、だらんと垂れている猛虎チンポを握り、目を閉じた。
　視覚を遮断することで、これから公開オナニーをすることや虎雄の童貞汁を淡い思い出の顔に向かってぶっ放さないといけないことなど、不愉快な現実を軽減したかったのだ。
「おお、オナニーをするぞ」
「あのチンポ、どれだけの大きさになるのかな」
「ザーメン！　ザーメン！」
　観客たちのざわめきが虎雄の恥辱を大いに煽り立てる。
　虎雄は武術で鍛え上げた集中力で猛虎チンポを扱く手に集中した。
　陰茎を根元から先端まで扱き上げ、先端から根元まで引き返す。
　竹刀による素振りのような真剣さで虎雄は必死に猛虎チンポを扱く。
　その表情の痛々しさは公開オナニーという破廉恥な言葉には、まったくもって不釣り合いなものであった。
　虎雄は必死に猛虎チンポを扱く。
　虎雄の脳裏に浮かぶのは尊敬する父親である源二の淫らな姿だ。
　徳郎たちに辱められ、フェラチオをさせられ、アナルセックスまでさせられた源二の蠱惑的な姿であった。
　虎雄は源二を尊敬している。
　その思いに偽りはない。
　だが、虎雄は己が汚れてしまったと確信している。
　数少ないオナニーのネタが尊敬する父親である源二の淫姿一色に染まってしまったことを汚れと言わずに何といおう。
　虎雄は公開オナニーをしながら必死に女体を思い浮かべようとする。
　けれど、童貞であり、エロ動画なども忌避して修行に明け暮れていた虎雄の脳に、源二という生々しさを超える色香の女体の記憶などあるはずがない。
　源二の肉体、源二の表情、源二のチンポ……
　虎雄の脳裏は源二が凌辱される姿で染め上げられていく。
　それに伴って、虎雄の猛虎チンポがその本性を露わにしていく。
　虎雄の大きく武骨な手に余る陰茎が充血し、より太く、より長く、より硬くなり、未来の生殖を夢見る姿へと変貌していく。
　ずる剥け亀頭はパンパンに膨れ、童貞のピンク色の傘を大きく広げる。
「すげえなあ、あの巨根」
「あんなでっかいのでがっつんがっつんされたら飛んじゃいそう」

「ありゃあ、食いまくりのヤリチンだな、間違いない」
　観客たちが虎雄のフル勃起猛虎チンポを好き勝手に評価をする。
　その声の一つ一つが虎雄の羞恥心を煽り、この状況への屈辱感を増していく。
「ここで皆様に大事な情報を公表したいと思います」
　徳郎がマイクで観客たちに話しかけた。
　虎雄は嫌な予感に襲われた。
　これまでの徳郎の言動が虎雄を利する結果につながったことなど一回もないからだ。
「今年の種馬は、童貞、なんですよ」
　徳郎の言葉に観客たちが騒めき、笑いだした。
「おいおい、あんな立派なチンポをぶら下げて童貞かよ」
「もしかして、セックスが怖かったのかしら」
「その年になるまで童貞とはかわいいもんだなあ」
　観客たちの嘲笑が虎雄の雄のプライドを傷つけていく。
「いわば、この儀式は種馬にとっての疑似セックス。
　皆様、どうか、セックスと掛け声を掛けてやってください」
　徳郎の言葉に虎雄は歯ぎしりをした。
　セックスとは、生殖とは、男と女が新たな命を宿すために行う神聖な行為なのだ。
　それを、こんな茶番で愚弄するとは、徳郎には人倫というものが欠落している。
　そして、虎雄が尊敬する父親である源二もまた、このように辱められたのかと思うと虎雄は胸が張り裂けそうになる。
「セックス！　セックス！」
「セックスするんだぞ！　種馬！」
「童貞汁をぴゅっぴゅするんだぞ、種馬！」
　観客たちが囃し立てる声が虎雄の雄の自尊心を砕いていく。
　目を閉じているせいか、虎雄の耳は観客たちの下品な声を明瞭に聞き取ってしまう。
　虎雄はこの不愉快な催しを一秒でも早く終わらせるべく、必死に猛虎チンポを扱いた。
　虎雄の頭の中が源二のエロ動画で溢れていく。
「お許しください……
　父上……お許しください……」
　虎雄は二重の意味で源二に許しを乞うた。
　オナニーを無様な行為と虎雄に教えていた源二の金言を破ることに……
　そして、尊敬する源二の屈辱的な姿を思い浮かべてオナニーをしていることに……
　虎雄はオナニーをする際の習慣となっている源二への懺悔で喘ぎ始めた。
「おいおい、この童貞、謝罪し始めたぞ」
「オナニーをするのに許可が必要な身体なのか」
「スケベだなあ」
　虎雄の苦悩など知る由もない観客たちが虎雄の喘ぎ声に騒めく。
「この種馬、オナニーとは男にとって最も無様で無防備な行為だと父親に教えられており、いわば、皆様に完全降伏する真っ最中なのです！」
　徳郎が虎雄の内心をマイクで暴露する。

　虎雄の心痛を理解させるためではなく、嘲笑うためだということが虎雄には分かった。
「あらまあ、変態的なお父さんだねえ」
「オナニーをしないように躾けるなんてな」
「純粋培養の箱入り息子か」
　観客たちが虎雄の必死のオナニーを嘲笑し、虎雄に男の何たるかを教え込んできた源二を愚弄する。
　虎雄の目から悔し涙が零れた。
　源二は虎雄にとって人生の指針そのものだ。
　その源二までもが何も知らぬ観客たちに愚弄されて、反論すらできない己の矮小さが悔しくてたまらなかったのだ。
「お許しください……
　父上……お許しください……」
　源二への懺悔を喘ぎながら虎雄はフル勃起した猛虎チンポをひたすら扱き上げる。
　腰の奥から虎雄の罪の証がこみ上げてきた。
「あ！　あっ！　ああっ！
　父上！　父上ぇ！」
　ドドドドドッピュ！
　虎雄の背徳的な叫びと共に虎雄のフル勃起猛虎チンポから童貞汁がぶっ放された。
　大きな金玉に相応しい量の雄臭い童貞汁がスケベな姿をした絵馬に降り注がれる。
「おおー、見事な射精だ！」
「絵馬とのセックスおめでとう！」
「セックス！　セックス！」
　虎雄の雄の力量を知らしめる見事な射精量と飛距離に観客たちが歓声を上げる。
　虎雄は肩で呼吸をしながら羞恥に震えた。
　虎雄にとって射精とは、男にとって最も無様で無防備なものであり、見世物とは真逆の行為なのだ。
　そんなものを見世物として行ってしまったことに、虎雄の倫理観は捻じれ苦しみ、羞恥心は血の涙を流す。
「そら、種馬。
　やることを忘れたのか？」
　徳郎が羞恥に震える虎雄を叱咤する。
「見られながらのオナニーが気持ち良すぎて頭がパーになったのか。
　この淫乱種馬」
　徳郎の嘲笑に、観客たちが大笑いをする。
　虎雄は怒りに顔を歪めながらも、やることを思い出した。
　一度、鳥居まで歩いて戻り、もう一度絵馬の前まで歩き、二度目のオナニーをするのだ。
　虎雄はまだオナニーをしなければならない屈辱に目から涙が零れる。
　だが、拒むわけにはいかない。
　虎雄がこの屈辱から逃れれば、虎雄が尊敬する父親である源二が、この辱めに晒される

のだ。
　源二の男気と名誉を守るためならば、仕方のないことなのだ。
　虎雄は目を開けた。
　淡い初恋の女性が描かれた絵馬には虎雄の童貞汁がべったりとくっついている。
　虎雄はそのことに覚えた罪悪感を胸の奥に押し込んだ。
　そして、射精を終えてもなおフル勃起したままの猛虎チンポをぶらんぶらんと揺らしながら、鳥居に向かって歩き始めた。
　虎雄の猛虎チンポは、虎雄が屈辱に打ちひしがれている中にあって、その雄々しさで雄の凄みを見せつけていた。
　勃起角度、太さ、長さ、存在感。
　そのどれもが並みの男とは一線を画した極上の雄であり、虎雄の屈強な肉体に相応しい巨根であった。
　虎雄の猛虎チンポは隆々とその存在感を示しながら先ほどの射精の残りの童貞汁でぬらぬらと濡れている。
「すげーなあ、あの童貞チンポ」
「勿体ないよな、あの迫力で童貞なんて」
「これからは気軽にセックスしようぜ」
　観客たちが虎雄の猛虎チンポの迫力に称賛の言葉を贈る。
　だが、虎雄にとってその称賛は屈辱でしかなかった。
　虎雄は武術家だ。
　武術家とは鍛え上げた肉体を駆使し、精神を律し、人間の、いや、生き物としての高みを目指す存在だ。
　だから、己の練度を称賛されるのならともかく、努力もせずに獲得した猛虎チンポを称賛されても恥辱を覚えるだけなのだ。
　虎雄は恥辱に震えながら鳥居へと歩く。
　その力強い歩みに合わせて勃起を維持した猛虎チンポがぶらぶらと揺れる。
　虎雄は羞恥に震える己の心を押し殺して歩く。
　この恥辱を尊敬する父親である源二も味わわされたのかと思うと怒りがこみ上げるが、この怒りを形にすることは虎雄にはできなかった。
　それは一時の勝利と引き換えに源二の男気と名誉を致命的に損なう行為だからだ。
　鳥居の下には徳郎がにやにや笑って立っている。
　その笑みに拳を叩き込めたのならばどれだけスカッとするだろうか。
　虎雄はその誘惑を必死に押し殺した。
「次のオナニー、頑張れよ、種馬」
　徳郎は虎雄を縛る心の鎖の強さを確認するかのように侮蔑の言葉を投げかける。
　虎雄はその言葉を無視して再び拝殿に向かって歩き始めた。
　虎雄の憤怒の強さを示すかのような強い足取りに合わせて虎雄のフル勃起猛虎チンポもぶるんぶるんと揺れる。
「ひゃー、苛々しているねえ、今年の種馬」
「おちんちんが苛々しているんだろうなあ」

「そりゃまあ、男だからセックスしたいよなあ」
　観客たちが虎雄を揶揄する言葉を次々と投げかけてくる。
　虎雄はその言葉の一つ一つを心の中で丁寧に踏み潰す。
　それでもなお、虎雄の怒りは収まることを知らない。
　再び、虎雄は拝殿の前に立った。
　絵馬が掛け替えられており、虎雄が海外放浪中に出会った、見た目が好みの金髪の女性の裸体が描かれていた。
　虎雄を辱めるためだけに、虎雄の足跡を調べ、誰だったのかを特定したのだろう。
　徳郎の悪意の深さに虎雄は苛々する。
　だが、尊敬する父親である源二の男気と名誉を守るためには、虎雄自身の感情など些細なことだ。
　虎雄はそう思い込み、再び猛虎チンポを扱き始めた。
「セックス！　セックス！」
「セックス！　セックス！」
「セックス！　セックス！」
　観客たちが虎雄のオナニーをセックスと囃し立てる。
　セックスとは、こんな見世物ではない。
　虎雄の中に怒りがこみ上げる。
　セックスとは、新たな命を授かるための男と女の神聖な行為なのだ。
　こんな無様で露悪的な見世物をセックスと囃し立てる観客たちの下品さに虎雄は強い不快感を覚える。
　だが、そんな虎雄の気持ちとは裏腹に、虎雄の猛虎チンポは勃起している。
　ピンク色の亀頭を我慢汁で潤ませ、次の射精に向けて準備をしている。
　虎雄の脳裏に源二の辱められた姿が浮かび上がる。
　徳郎のチンポをしゃぶる源二……
　徳郎のチンポの味に勃起する源二……
　徳郎のチンポに善がり狂う源二……
「お許しください……」
　虎雄の口から再び源二への謝罪の言葉が零れ出た。
　こんなことを口にすればまた観客たちに笑われると想像がついたが、オナニーを覚えて以来の習慣は簡単には変えられない。
「父上……
　お許しください……」
　オナニーをしてしまって申し訳ない。
　尊敬する父上でオナニーをして申し訳ない。
　虎雄は二重の謝罪に喘ぎながら猛虎チンポを激しく扱きたてる。
　腰の奥からねっとりとした罪の証がこみ上げてくる。
「ああ！　父上！　父上ぇ！」
　虎雄は再び射精をした。
　今夜二回目にもかかわらず、臭いも量も一回目と遜色のない童貞汁が勢いよく飛び出

し、絵馬の胸から腹にかけて汚していく。
　虎雄はその絵馬を見て、罪悪感に襲われた。
　初心な虎雄にとって、絵とはいえ女性に童貞汁をぶっかける行為は罪深いものであったし、オナニー自体が虎雄にとって罪深い行為であった。
　虎雄は己の男気がどんどん汚されていく気がして泣きたくなった。
　けれど、虎雄は歯を食いしばって泣きたい気持ちを押し殺す。
　ここで泣けば、徳郎を喜ばせ、観客たちを騒がせることは容易に想像がついたからだ。
「よくセックスできたな、童貞種馬！」
「絵馬も悦んでいるぞ！」
「見事なセックスだったぞ！」
　観客たちが虎雄の神経を逆撫でにする。
　虎雄は二度の射精を終えてもなおいきり立ったままの猛虎チンポをぶらんぶらんとさせながら鳥居へと歩く。
　その歩みに合わせて、尿道に残った童貞汁が鈴口から零れ、石畳に卑猥な染みを残す。
　あと一回……
　あと一回だ……
　虎雄は屈辱に震えながら、心の中でそう念じた。
　虎雄の怒りに合わせるかのように虎雄の逞しい筋肉が隆々と蠢く。
　鳥居の前にはにやにやと笑う徳郎が待っていた。
「虎雄、お前さん、変態だったんだな」
「何だと……」
　徳郎の言葉に虎雄は握り拳を作った。
「だってそうだろ？」
　だが、徳郎は己の優位を確信しているのか、虎雄の握り拳への警戒を見せようともしない。
「普通の羞恥心がある人間だったら、人前でオナニーなんかできないものだ。
　それなのに、虎雄は既に二回もオナニーをしている。
　見られて気持ちいいんだろ？
　チンポもそう言っているぞ」
　ドスン！
　虎雄の握り拳が鳥居に叩きつけられた。
　その怒りの凄まじさに観客たちのざわめきが静まる。
「おいおい、図星を刺されたからって鳥居を殴ることはないだろ？
　不敬な奴め。
　源二殿はお前にどんな礼節を教えたんだろうな」
　尊敬する父親である源二のことまで揶揄され、虎雄は鳥居に叩きつけた拳を震わせる。
　だが、極めて不愉快なことだが徳郎の言い分にも一理ある。
　徳郎を殴れないからといって、鳥居を殴っていい道理などないのだから。
　虎雄は荒く呼吸を繰り返しながら、己の怒りを鎮める。
「そう、カリカリするな。

あと一回オナニーをすれば、ご褒美が待っているからな。
お前さんに必要なものだ。
嬉しいだろう？」
虎雄に必要なもの？
徳郎が何を言っているのかが虎雄には分からなかった。
極めて楽観的な予測を立てるのならば、虎雄と源二への辱めをこれで止める、ということぐらいか。
だが、徳郎がそう簡単に源二への歪んだ思いを手放すとは、虎雄には思えなかった。
「そら、早く行ってこい」
徳郎に胸を押され、虎雄は舌打ちをしてから拝殿へと歩き始めた。
虎雄の激高に影響されたのか、観客たちは静まり返っている。
その沈黙の中、虎雄は拝殿へと向かって歩いていく。
次もまた、虎雄が過去にぐっときた女性の裸体が描かれた絵馬に向かって射精をさせられるのだろう。
回避することができないのならば、さっさと終わらせるに限る。
虎雄は憤怒に顔を歪めながら拝殿へと歩いた。
絵馬が見えてくる。
その絵馬を見た虎雄は、頭が真っ白になった。
その絵馬に描かれた人物に向かって童貞汁をぶっ放すのはあまりにも冒涜的だったのだ。
絵馬に描かれていたのは、男であった。
虎雄が敬愛する父親にして、人生の指針にして、男の中の男である源二。
その源二がチンポをフェラしている姿が絵馬には描かれていたのだ。
幾度となく怒りを飲み込んできた虎雄にとって、これは虎の尾を踏むことに等しい冒涜であった。
「毒島……徳郎！」
虎雄は怒りに我を忘れた。
振り返り、鳥居の下に立つ徳郎に向かって一直線に駆け出した。
鍛え上げられた筋肉が野生動物のようにしなやかに躍動する。
その振動に合わせてフル勃起している虎雄の猛虎チンポが激しい勢いで揺れる。
虎雄は鳥居の下に立つ徳郎を睨みつける。
頭の中が怒りで染め上げられ、徳郎を殴り倒すことしか頭にない。
段々と虎雄は徳郎に接近する。
徳郎はにやにやと笑っている。
その不愉快な笑顔を痛苦に染め上げてやる。
虎雄は右拳を振り上げ……
ポスッ……
虎雄の右肩に針のようなものが刺さった。
虎雄は気にすることなく徳郎に向かって駆け寄り、足がもつれて転んだ。
虎雄は立ち上がろうとするが、全身が痺れて動けない。

徳郎がゆったりとした足取りで虎雄に近づく。
その徳郎の背後には銃を構えた神木が立っている。
「虎雄、お前みたいな猛獣を相手にして、何も用心していないはずないだろ？」
徳郎が嫌らしい笑みを浮かべて虎雄を見下ろしている。
虎雄は徳郎を殴ろうとするが、立ち上がることすらままならない。
「痺れ薬だ。
しばらくの間、お前は何にもできない」
近づいてきた神木の後ろには糸井と沼沢も立っていた。
「この……外道が……」
虎雄は徳郎を罵った。
「俺が外道なら、お前は人でなしじゃないか。
実の父親である源二殿がセックスをしている姿に欲情して射精をしたのだからなあ」
「ぐううううううううううう」
触れられたくない過去の過ちを徳郎に指摘され、虎雄は唸ることしかできない。
「さて、それでは種馬としての最後の務めを果たしてもらおうかな」
徳郎が指を鳴らすと神木と沼沢が虎雄を抱え上げた。
虎雄は大柄で屈強な体躯をしているが、動けない今、剣術で鍛えている神木と沼沢の前では猫の子同然の無力であった。
虎雄は衆目にアナルまで晒す無様な姿勢を取らされる。
「それじゃあ、一杯童貞汁をぶっ放せるようにイイコトをしてあげよう」
糸井が虎雄の眼前にピンク色の座薬を突きつけた。
「止めろ……止めろ……」
虎雄は縺れる舌で必死に制止するが、誰も聞き入れようとしない。
虎雄の剛毛に囲まれたアナルに糸井が座薬を押し込んでいく。
「おあああああ……」
尻の奥が熱くなり、虎雄は呻いた。
「それでは皆様、種馬の躾も終わりましたし、最後の種付けをご覧ください」
徳郎の言葉を合図に、神木と沼沢が虎雄を絵馬の方へと運び始めた。
「嫌だ……嫌だあ……」
絵姿とはいえ、尊敬する父親である源二に童貞汁をぶっ放すことへの嫌悪で虎雄は呻く。
だが、痺れ薬を打ち込まれた虎雄には逆らう術がない。
神木と沼沢に運ばれて絵馬の前に到着する頃には、虎雄の猛虎チンポは痛いほどに勃起し、我慢汁をぬらぬらと垂れ流し、猛虎チンポに淫靡な艶を添えていた。
「それでは皆様、種馬が射精できるように掛け声をお願いします」
「セックス！　セックス！」
「セックス！　セックス！」
「セックス！　セックス！」
徳郎の言葉に合わせて観客たちがセックスと囃し立てる。
「いっぱい童貞汁を出そうなあ」

糸井が虎雄のフル勃起猛虎チンポを掴み、そして容赦なく扱き始めた。
激しい愛撫とアナルに挿入された座薬のせいで、虎雄の腰の奥から罪の証が怒涛の勢いでせり上がってくる。
「いやだ……たすけ……ゆるして……
ちちうえ……ちちうええ！」
糸井の手コキで虎雄は呆気なく射精をした。
三度目にも関わらず量も臭いも常人以上の童貞汁が勢いよく噴出し、絵馬に描かれた源二の顔や胸を白く汚していく。
「うあああああ……」
自らの童貞汁で源二を汚してしまったショックで虎雄は嗚咽を漏らし始めた。
「おやおや、泣くほど気持ち良かったようだな、虎雄」
徳郎が虎雄の涙を指で拭い、見せつけるように虎雄の目の前に差し出した。
「そら、まだまだチンポが元気じゃないか。
もっともっと、童貞汁をぶっ放すんだな」
「いやだあああああああ……」
虎雄は縛れる口で必死に訴えるが、この場には虎雄の訴えを聞く心優しい者などいない。
虎雄のフル勃起猛虎チンポを糸井が容赦ない手つきで扱き上げる。
虎雄は丹田に力を込めて射精を堪えようとするが、痺れ薬で動きが鈍っている上に、オナニーも満足にしていない初心な虎雄に射精を我慢する方法など分かるはずもない。
「ひいい……ちちうえ……ちちうえぇ……」
糸井に責め立てられた虎雄の猛虎チンポがまた童貞汁をぶっ放した。
長く糸を引いて飛ぶ虎雄の童貞汁が絵馬に描かれた尊敬する源二の姿をどんどん汚していく。
己のザーメンによって尊敬する源二の絵姿を汚していく。
源二を世界で一番の男だと本気で信じている虎雄にとって、キリシタン弾圧の踏み絵にも等しい精神的責め苦であった。
「いやだああ……ちちうえぇ……」
虎雄は縛れる口で泣き叫ぶが、虎雄を助けようとするものは誰もいない。
観客たちはセックスと囃し立て、糸井たちは虎雄の童貞汁を搾り上げ、徳郎はその有様を笑って愉しんでいる。
「金玉が空っぽになるまで愉しめよ、虎雄」
「うあああああ……」
徳郎の邪悪な宣告に虎雄の心は絶望で引き裂かれんばかりであった。

奥付

『父が為　沈みし地獄』より第一話

初出：2022年7月5日
著者：金目

金目の同人活動一覧
【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【DLsiteがるまに】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep